

言語派社会学の理論構成

橋爪 大三郎*

行為の二重性、すなわち、行為が、実物世界のなかでの出来事であることと、意味理解を通じて効力をもつこととの関係を、これまでの理論は整合的に取り扱ってこなかった。構造主義は、記号のレベルが実物世界から切り離されていること（恣意性の原理）に注目し、マルクス主義の想定を覆した。ヴィトゲンシュタインの言語ゲームは、構造主義が想定した二重性をつき抜け、世界が一重であることに徹したアイデアである。行為は人びとのルールに従ったふるまい、すなわち、言語ゲームのなかで意味をもつ。その意味は、実物世界のなかでの個物の列挙に示されている。

実物世界のなかに人びとの身体が散在しているとき、間身体的に波及する形式が、言語である。言語派社会学は、言語に加えて、性と権力を、社会空間の基本的な作用力と想定する。言語／性／権力から、さまざまな社会形象が派生し、制度的な前提が選択されて具体的な社会システムが形成されてゆく。このようにして、言語派社会学は、社会の普遍的な原理と、社会システムの経験的な考察とを、包括する理論構成をもつことができる。

キーワード：実物世界、言語ゲーム、言語派社会学

1 理論としての社会学

ニュートン力学が成功を収めたことで、理論はその威力を認知された。

理論は、実物世界（たとえば物体の運動）を説明する、単純で基本的な原理（たとえば運動方程式）である。理論は、実物世界の単純な見取り（モデル）を提供する。そして、実物世界と十分に合致する予測を導き出す。

理論は一般に、①よく定義された一連の概念のセットをそなえ、②モデルを構成する要因の相互関係が（たとえば方程式のかたちで）特定されていて、③十分に単純で扱いやすくなければならない。理論はそこから、論理演繹的な操作によって、帰結（予測）を導くことができる。以上の構成は、現象に合わせてアドホックに変更されるものではなく、いつでもどこでも普遍的に成立するものと想定されている。

理論は、実物世界と合致しなければならない。理論の予測が、実物世界と合致することを、実証という。ここで実物世界（real world）とは、理論と独立に、理論に先立って存在しているもので、理論がなくても成立していると想定される。この意味で実物世界は、前理論的であるが、実際には、観測される実物世界は理論負荷的である。すなわち、複雑で多面的な現実世界のどの側面（データ）をどのように理論の予測と照合するかは、多分に恣意的であり、理論を支持するようなデータが集められやすい。

ともあれ、ニュートン力学を典型とする、物理学を範型に、さまざまな自然科学の理論が構想され、成功を収めた。

*

自然現象に加えて、やがて社会現象も、科学的な考察の対象となった。社会科学の出発である。

経済学は、物理学のアナロジーによって、理論を構成した。一般均衡理論は、力学システムを範型に、価格の相互決定を連立方程式に表現した。

パーソンズの社会システム論もまた、物理学を範型とした。物理学は、要因間の因果関係（causality）をモデル化している。そこで、社会システムも、要因（物理的な現象の一種としての行為）間の因果関係として考えられた。

物理学の理論は、公理的構成（axiomatic construction）をとることを理想とする。公理的構成とは、ユークリッド幾何学のように、明示された少数の前提（公理）から出発して、論理演繹的操作に従い、一連の定理を導き出して、理論を形式的なシステムとして編成することをいう。経済学もこのような構成をとった。社会学はどうか。

社会学がこのような理論を構成しようとしても、問題点がいくつかある。ひとつは、社会学のとりあげる要因の多くが実数で表せるものではなく、カテゴリーで表すしかない、という変数問題。もうひとつは、したがって、要因間の関係を方程式として表現できない（解くこともできない）という、演算問題。さらには、行為の背後に行為者の意志を想定するならば、行為者の意志（必ずしも物理的な現象でない）の相互関係をどのようにモデル化するかという、社会の記述問題。これらのことから、社会システム論は、公理的な構成をとることができず、理論の内実を肉付けすることもできなかった。

2 社会の記述

そもそも、理論によって社会を説明しようとする以前に、社会をどのように記述しておくべきかという問題がある。社会は何か。社会はどのようにしてそこにあるのか。

社会システム論は、社会が、行為から構成されているとした。社会システム論ならずとも、多くの社会学者は、社会を、社会に属する個々人の、さまざまな行為の

*東京工業大学大学院社会理工学研究科教授 hashizm@valdes.titech.ac.jp

集積だと考えてきた。

行為は、人間の身体の挙動（筋肉の運動）をその素材としている。けれども、行為は、身体の挙動そのものではなく、その意味を実質としている。

行為の記述や理解を、その意味と結びつけて考えるべきことを、ウェーバーやパーソンズは十分に意識していた。たとえば、ウェーバーは、行為の当事者の思念する意味と、観察者がそこに読み取る意味とを区別し、行為を観察し記述し理解するための条件を探っている（Weber 1922=1972: 14ff）。またパーソンズは、行為する複数の人間の意図や動機を問題にし、その整合性をダブル・コンティンジェンシーとして考察している。

行為をその意味や意図において考えることは、妥当なようにみえる。けれども、このように考えると、ただちに、扱いのむずかしい一連の問題に逢着する。すなわち、①行為者が思念する意味と、観察者が読み取る意味とは、一般に合致するのか、合致するとすれば、その条件はなにか（意味の合致問題）、②行為の当事者が思念する意味と、観察者が読み取る意味とでは、どちらが、その行為にとって本質的なのか（意味の優越問題）、③行為の意味が、それを受け取る第三者に理解され、効力をもつことは、どのように保証されているのか（意味の妥当問題）、といった問題である。

こうした問題は、行為とその意味とを、ふたつの異なるレベルのことがらだと想定するかぎり、避けることができない。行為は、物理現象に基礎をもつ、身体の挙動として観察できるものなのに対し、その意味は、そこに付加された理念的なものかである。意味はさしあたり、言語で記述するしかない。とりわけ、観察者がそれを記述する場合はそうである。言語の意味は、ソシユール以来、実物世界とは切り離された、理念的なものとして扱われてきた。ゆえに、行為の意味も、物理現象を離れた理念的なものとして想定されるのである。

こうして、行為と行為の関係は、物理現象に基礎をもつ因果関係のレベルと、行為の意味理解にもとづくレベルとの、二重のレベルで考えられる。ある人が別の誰かを殺そうと、ピストルを発射する場合には、行為の当事者も、それを観察する第三者も、それを「ひとを殺そうとする行為」と認識するであろう。けれども、実際にそれが殺人となるかどうかは、ピストルの弾丸がその誰かに致命傷を負わせるかに依存しているので、その誰かがその行為の意味を理解するかどうかには依存しない。いっぽう、ある人が別の誰かに好意をもって握手をする場合には、その誰かが行為の意味を理解してはじめて、その行為が成立する。約束や命令など、遂行的（performative）な行為の多くが、行為の意味が理解され効果をもつことを、行為が成立するための条件としている。行為と行為との関係は、ある場合には意味連関によって、ある場合には因果関係によって、ある場合には、意味連関と因果関係の複合によってつながっているように見え、複雑である。そこに統一的な見通しを与えることは、容易でない。

ルーマンの社会システム論も、こうした議論の延長上にある。ルーマンはシステ

ムの機能を、複雑性の縮減であるとする。これは、物理現象が微細な細部をもつ複雑な因果連鎖であるのに対し、意味はそれを概括するカテゴリーからなるため、意味のレベルで成立する行為の連関は、一般に、因果連関とは独立した単純な自存性をもつことを根拠にしている。

問題が複雑であるようにみえるのは、そもそも、物理現象としての因果連鎖と、意味の連関とを、異なる2つのレベルとしてたてることによるのではないか。言い換えれば、行為とその意味とを分離することによるのではないか。ここから、行為をその意味と分離させずに扱う、もうひとつの議論の可能性——言語ゲーム——が与えられる。これは、物理現象と区別してとらえられない、よりシンプルな行為の実態である。言語ゲームについては、あとでさらに詳しくのべる。

*

以上に関連して、行為の「接続」の問題を、さらに考えてみたい。

行為と行為の接続が問題になるのは、物理的な因果関係としては蓋然性が低いのに、ふたつの行為が継起するようにみえるから。すなわち、行為をあくまでも物理的な因果関係のレベルで記述しようとする追尾の視線を手放さないから、だと考えられる。

ある国で、誰かがピストルで射殺された。その事件の報道にショックを受けて、別な国で抗議デモが起こった、とする。こうした連関の全体は、物理的な因果関係の枠内にあるだろうか。事件を目撃した証人が、警察にその事実を語り、それを報道機関が取材してテレビのニュース番組で放映する。その内容がさらに別な国にオンエアされて、人びとの知るところとなり、怒りと抗議の行動をひきおこす。これらが順に起こるについては、そもそもそれを物理的な因果関係が支えるのでなければ、これらのことがらが継起するはずがない。警察が調書を作成し、記者発表をして、番組が制作される過程にしても、その番組のテレビ放送が国際中継される過程にしても、物理的にこれらの事象が継起する蓋然性はごくわずかであると言えない。にもかかわらず、それらが継起したところに、行為が継起する場合の特別な条件、すなわち、意味連関にもとづく行為の接続が実現する条件が与えられていると考えるのである。

因果関係は、事象の性質それ自体によって、他の事象と連続し、波及していく。このことは、実物世界の物質的基盤をなしている。それに対して、行為の意味連関は、事象の因果連鎖とは異なるレベルで接続していく、とされる。この接続は、必然的なプロセスではなくて、条件のもとにある。すなわち、行為と行為は、接続する場合としない場合があり、接続するための条件をあらかじめすべて特定して書き出すことはできない。（もしも書き出すことができれば、その条件を事象の因果連鎖のレベルで特定できたことになって、異なるレベルにあるとは言えなくなる。）このためここから、行為は特定の条件なしに、みずからを接続させていくという、自己生成する社会システムの外見が生ずる。

ここで無視され消去されているのは、行為の意味を操作する主体の存在である。

行為がもうひとつの行為に接続する、という。それは、最初の行為の意味を理解して、それを前提に、もうひとつの行為を、ある主体が生み出したからである。行為と行為が自存して、システムのなかでつぎつぎに接続すると見えるのは、行為を生み出している主体を消去する限りにおいてである。

主体もまた社会システムのなかで構成されたものであって、行為のほうが自存する実態である、ゆえに、行為と行為の関係に着目して主体を消去することには根拠がある、という指摘があるとすれば、もっともである。けれども、行為がそもそも独自の接続の可能性をもつのは、因果連関ではなく意味連関のなかにおかれるからであって、そのつど、先立つ行為を意味あるものとして受け止め、それに応答する人間がいるかぎりであることを、忘れてはならない。それを主体とよぶかどうかは別として、このことは実際である。

行為を受け止め、理解し、それに応ずる行為をうみだす人びとのふるまいをありのままに想定するならば、行為が「接続」することを主題とするかわりに、人びとのふるまいの秩序をそのまま主題としてもよいことがわかる。言語ゲームは、そのような主題化の試みのひとつである。

*

ちなみに、言語のシステムは、行為のシステムの特種な場合であろう。個々の発話や意味解釈は、個々の人びとのふるまいである。言語は、行為のなかで、「意味」をもつことが当然とされている。言語は、行為のなかで、差異にもとづく形式であることに特化しており、物理現象としての因果関係を無化して、意味作用にその効果を収斂させている。

このため、言語（の発話）が物理的な因果関係によって、ほかの言語（の発話）を生み出すとは考えられない。言語（の発話）は、その意味を通じて、ほかの言語（の発話）と関係するのが当然と思われる。これは、行為が、意味連関によってほかの行為と接続することの、実例となっている。

言語が、自己生成するシステムの見かけをもつこと、しかしその背後に、言語を生み出す主体（人びとのふるまい）が控えていることは、行為一般の場合と同様である。言語の構造や秩序に注目しているかぎり、この主体が問題とされることはない。

3 言語とルール

言語を理解し、言語を用いることは、人間が人間であるための最低限度の要件である。言い換えるなら、言語を用いるのが人間である。言語を用いることは、人間の本質的な能力であると考えべきだ。

では、言語とはどのようなものだったか。

言語は、多くの言葉からなる。言葉は、音声や文字や動作などとして、とりあえず存在している。言葉の特徴は、その存在と離れた別のもの（別の事物や、あるい

は、もっと抽象的なもの）を、指示することができる点にある。言葉が指示するものを、言葉の意味という。このような性能をそなえている事象は、言語のほかはない。

言語は、この性能によって、実物が不在な状況下でも、そのものについて言及したり、思考したり、行為したりする（たとえば、そのものをあげると約束する）ことを可能にする。言語は、人びとに思考の秩序を与えると同時に、人びとの間にさまざまな効力（遂行文によって可能となるようなもの）の編み目をもたらし、社会関係の秩序を与える。

人びとが言語を行使することは、行為である。そこには二重の作用がある。ひとつは、意味を表現し伝えるという意味の作用。もうひとつは、遂行文のはたらきによって社会関係を構築するという遂行的な作用。各人の遂行的な行為は、他者に対して効力をもち、他者の行為の前提となる。そして、この二重の作用は、どちらも、言語の固有の性能に基づくもので、物理的な因果関係からは隔たっている。

*

言語の秩序（したがって、社会の秩序）が、物理的な現象とは異なるレベルのものであることを強調したのは、構造主義であった。レヴィ=ストロースであれ、フーコーであれ。

構造主義は、実物世界のレベルと記号のレベルの区別を発見する。栄養に対して、料理の対立のシステム。生殖に対して、家族・親族のシステム。暴力に対して、権力のシステム。実物世界に対して、意味のシステム。後者を貫く記号のレベルは、実物世界のレベルと、無関係に二重になっているわけでも、一重に貼りついていないわけでもなく、相対的な位置を保ちながら、恣意性の原理で隔てられて並行になっている。

それでは、実物世界と記号のシステムとの関係は、もう少し詳しくみるなら、どのようなものと考えられているのか。

構造主義が発見した実物世界のレベルと記号のレベルの二重性は、もともとソシュールが定式化したものだった。記号の指示作用は、注意ぶかく実物世界から切り離され、記号のなかで能記（聴覚映像）から所記（概念）へと向かうように想定されている。記号（すなわち言語）は、実物世界を恣意的に切り分けたカテゴリーである。ソシュールは、そのように主張することで、実物世界（リアリズム）／理念的な世界（イデアリズム）の二重性を、言語理解の前提としたのだった。

ソシュール～構造主義の想定する世界の二重性は、それに先行するマルクス主義の想定を批判しつくがえすものであった。これはしばしば、言語論的転回とよばれる。

マルクス主義は、すべての基底に実物世界を想定する。その実物世界から、実物世界の反対物である、意識がうまれ出てくる。さらにそれが、記号や言語のかたちで整序されるとする。言及不可能な領域である実物世界から、意識やそれ以外のさまざまなすべてが生み出されるという、意識・疎外モデルである点は、フロイトの

世界像とも共通する。

マルクス主義のこうした想定は、構造主義の二重性とは異なって、意識や言語・記号世界が下位のレベル（実物世界）に根拠をもち、関連づけられ（それゆえ、恣意的ではなく）て、その内実や正当性を検証されるという、それ自体は検証されない形而上学（ドグマ）にまとわれている。そして、このドグマは、マルクス主義として、言語・記号世界のなかの特権的な場所に書き込まれている。したがって、すべてが実物世界に根拠をもつという当初の循環は、マルクス主義は論証抜きに正しいというドグマの循環へと変態し、マルクス主義以外の言説は正しくないというイデオロギー的な態度を帰結する。このイデオロギーは、不断の政治闘争によって、実践のなかで、正しさが証明されていくとされる。言説のなかのこうした闘争は、実物世界のなかの矛盾と対立（階級闘争）の反映であるとされ、マルクス主義の循環が完成する。ここでは、言語が固有の位置を占めることは許されない。

*

ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム（language game）は、構造主義の想定した世界の二重性を突き抜け、世界が一重であることに徹底したアイデアである。

ヴィトゲンシュタインも初めは、実物世界と言語が並行してそれぞれ独自に存在すると考えた。『論理哲学論考』にいう、写像理論である。写像理論では、実物世界と言語はそれぞれ要素的な単位にまで分解可能で、すみずみまで同じ内部構造をもち、ずれや齟齬なくぴったり対応しているとされた。この完全な対応が、言語が厳密に論理的・科学的に実物世界を指示しうることの根拠であると信じられた。そこには、マルクス主義のような実物世界（下部構造）～意識や言語のレベル（上部構造）のあいまいな対応や、それゆえ生じるイデオロギーの対立といった余地はない。実物世界が言語を根拠づけるのではないという点で、ヴィトゲンシュタインの写像理論は、マルクス主義ともフロイトとも決定的に異なる。そして、ソシールの恣意性の理論とも対極的なものだった。

しかし、ヴィトゲンシュタイン自身がやがて、この初期の写像理論を否定してしまう。それは、写像理論の主張にいくつもの矛盾が見つかったからであるが、より根本的には、「実物世界と言語とが完全に対応する」という主張自身が、証拠のあがらないドグマだったからである。

こうして着想された言語ゲームは、実物世界と言語（ないし観念の世界）の二重性を前提としない。そのかわりに、世界は、実物とルールとでできあがっていると想定されている。言語ゲームとルールは、実態として同じものである（橋爪 1985）。行為は、言語と同じく、実物世界のなかで生起するままのものである。その意味（ルール）は、実物世界の外側にあるのではない。

このラディカルな想定が、どのように可能になっているのか、言語ゲームをさらに詳しくみてみよう。

ヴィトゲンシュタインがルール（規則）をつかまえる仕方は特別である。名詞（ものの名前）についてのルールを、彼は、個物としての1つ1つの机（ただしま

だ、それが机であることは判然としていない）の列挙によって示す。最初の「机」、2番目の「机」、3番目の「机」、……。机とは何かを知らないある人間が、それらに共通するある特徴を見つけたときに、「わかった！」という理解の瞬間が訪れる。「机」を机たらしめているルールは、そこにある。そこに見てとられている。実物である有限個の「机」を列挙すること（いわば有限数列）と、それを見ること、そして理解することのなかに、ルール（机の意味）が残りなく現れているのである。

この世界の実物のすべてを、机と机でないものに分けること。机の意味を知っている者なら誰でも、どれが机でどれが机でないかがわかること。これが、机がものの名前であるということのルールである。世界には、数えきれない実物があるだろうが、その有限な一部分を見ただけで、のこりの数えきれない実物についてあてはまる名詞の意味を理解してしまう。不思議なことだが、これこそ、言語を用いるすべての人びとがやっていることなのである。

ルールは、記述されないまま、そこにある。端的に、そこにあるのである。

ヴィトゲンシュタインの有名な、石工と助手の言語ゲームは、この延長上にある。観察者が、石工と助手がなにかをしている（たぶん石造りの家を建てている）ところにやっている。石工がなにかを叫ぶと、助手があるかたちの石をもっていく。やがて観察者は、彼らの使っている言葉（柱石、梁石、石板、台石）の意味と、彼らの行為の意味（石工と助手が家を建てている）を理解する。この簡単な例（2人4語ゲーム）は、この社会（ N 人 n 語ゲーム）にそのまま拡張できるのではないか。第1の例、第2の例、第3の例、……。以下、同様）の列挙である『哲学探究』という書物の全体が、そのことを示唆する。

ではなぜ、言語ゲームは、そのルールは、「わかる」のか。

「わかる」とは何かを記述し、説明することができるとしたら、それは、「わかる」ことの理論になるだろう。しかし、ヴィトゲンシュタインは、それは不可能だし不必要だと考える。「わかる」ことは、ルールの存在と同じこと（表裏の関係）なのだ。

大澤真幸（1990）にいう「第三者の審級」は、記号以前の実物世界から、記号秩序が立ち上がるための条件を特定する、理論的試みのひとつである。実物世界と記号の二重性の構成をとっている点で、マルクス～フロイト～ラカンの系列にあると言えよう。しかし、このような説明によって、記号秩序やルールの存在性格が、そしてその内実が、その分だけ明らかになったと言えるのだろうか。言語ゲームの理解を踏まえるなら、そうではないと考えられる。理論は、単純で基本的な前提から、複雑な現象を説明することを役割とする。ルールと記号秩序の存在は、その単純で基本的な前提にほかならない。その前提を、さらに成り立たせる前提があるとして、それと結びつけようとする努力は、理論を複雑にするいっぽう、新たな内容をつけ加えない。

4 言語派とは何か

社会の理論を構想する場合、社会をどのような要素からなるどのような内部構造をもったものとするかが、ポイントになる。

物理学は、実物世界の内部構造を、アトムイズム（要素的な実体とその相互関係）によって与える。これにならった社会システム論では、社会の要素的な実体を、個々の人間やその行為であると想定した。

けれども、社会がユニークであるのは、要素的な実体である個々の人間のなかに、そうした人間たちの全体である社会が「凝縮」されていることである。個々人のなかに社会が反映している。これをつきつめると、個々人が社会的であるから、その集まりが社会なのだということになる。となれば、「ホップズ的秩序の問題」は、仮象である。社会と切り離された、まったく自由な個人が集まって、なぜか秩序ある社会ができるのではない。もともと個々人は、社会のしるしを刻印されていて、集まれば社会ができるのは当たり前なのだという。

ここは大事な点なので、もう少し丁寧に考えていこう。

現象学や、それに影響された現象学的社会学は、人間の社会的経験は、そのひとの感覚や認知を通じて構成された、個人的経験であることを強調する。そのひとが経験する他者も、社会的出来事も、そのひとが自分のなかに構成した現実である。そうすると社会は、こうした個人的な現実の、総和以上のなにもものでもない、とみえてくる。

この指摘は、理由のあるものだが、社会のあり方を正確にとらえたものとは言えない。どういうことか。

現象学は、経験科学の原則に忠実に、知識の正当化を試みる。実物世界のあり方の確かさは、感覚や認知など、ひとりの人間の経験に取り込まれ、検証されたときに、確実なものとなる。この方法を社会にあてはめると、社会のあり方の確かさは、ひとりの人間の経験に取り込まれ検証されたときに、確実なものとなる、となる。この結果、個人に社会、社会に個人という、パラドクシカルな相互嵌入の構造が生じるのである。

議論の構造は、こうである。まず、基底となる実物世界があり、つぎに、それを反映した（いくつもの）経験的現実の世界があり、さらに、それらを寄せ集めた「社会」の観念がある。経験的現実の世界は、経験科学の原則から、最終的でなければならない。一方、「社会」は、全体的でなければならない。この関係が整理されていないのである。個人と、その総和である社会、という古典的な観念を保ったまま、その反対である現象学の原理を採用するから、このようなパラドクスが生じてくる。

そこで、こう考えるべきだ。まず、個々人の感覚や認知を知識の正当化の規準とする、経験科学の原則を、そのまま社会にあてはめるのはやめる。つぎに、なぜ経

験的な現実の世界が複数あるかと言えば、それは、多くの個々人がいるから、つまり、実物世界のなかで生きている人びとの身体が複数あるからだと考え、それを社会の局所的（local）な現れと位置づける。さらに、それらの身体を配列させている実物世界そのものを、社会の全域（global）と位置づける。局所と全域は、相の違いにほかならず、互いを排除するものではないし、どちらかが最終的なものでもない。そのうえで、身体と身体を連結し、社会の全域に社会としての固有性を与える作用を、具体的に特定することを、社会理論の内容とすべきなのである。

*

さて、社会の基底をなす、このような作用の典型こそ、言語にほかならない。では、ここにいう言語とは何であろうか。

ヴァイトゲンシュタインは、さまざまな人びとのあらゆる行為を含むこの世界の根拠をさかのぼり、そこに、これ以上単純にできない人びとのふるまいの一致——言語ゲーム（のルール）——をさぐりあてた。それは、あるひとの身体の挙動であるが、また別なひとの身体の挙動へと転移していく。言語ゲーム（のルール）は、身体が置き換わることによって、不変である。すなわち、間身体的に存在している。この意味で、言語ゲーム（のルール）は、社会の局所をはみ出し、全域へと展開している。

言語は、言語ゲームの一部である。すなわち、言語は、言語を用いるという特別なタイプの言語ゲームの名前であり、また、その言語ゲームの出力（産物）の名前である。

言語ゲーム（行為と考えてもよい）と、その産物、そして実物世界の関係について、考えてみよう。

行為は、実物世界のなかで行なわれる。行為は、実物世界のなかに、さまざまな帰結をひきおこす。そのうちあるものは、行為が終わっても、たとえば加工品として、ながくそのかたちをとどめる。加工品は、意味的に、また物理的に、それに後続する行為の前提となる。このようにして、人びとの生きる実物世界は、さまざまな行為の意味に満たされている。

言語は、実物世界のなかで用いられる。言語も、実物世界のなかに、さまざまな帰結をひきおこす。文字のように、ながくそのかたちをとどめ、時間的、空間的に離れた人びとに伝わって、理解され、効果を与えたりもする。それ以上に言語が本質的なのは、人びとの感覚や認知をあるパターンのもとに一致させ、人びとの経験を言語と調和したものにつくりあげることである。加工品の存在が、それに輪をかける。実物の机の存在は、言語の机をかたどっている。これほど確かな言語と実物世界の一致はあるだろうか。実物世界を生きる人びとは、日々、この実物世界が言語と調和し、言語と一致していることを確信する。このようにして、人びとの生きる実物世界は、さまざまな言語の意味に満たされている。

言語は、人びとの感覚や認知をどのようにあるパターンのもとに一致させるのか。ヴァイトゲンシュタインは、「痛い」という言葉について考察し、私的言語は不可

能である、「痛い」と言うから痛いのである、などとのべた。「痛い」という言葉は、人びとのふるまいのルールとして、そこにある。このルールに合致するように、誰もが自分の経験を理解し、表明していく。また、ヴィトゲンシュタインは、色彩の逆スペクトル（あなたの赤は私の青、あなたの青は私の赤）について考察し、用法が一致していれば、各人の感覚の実質は問題とならないことを指摘した。

このように言語は、人びとの身体と身体のあいだにある形式（パターン）であって、どの身体にも専一に帰属していない（帰属していれば、私的言語ということになる）。したがって、帰属しているとすれば、その帰属先は、社会が成立している実物世界そのものということになる。それは、たとえば、こういう感じだ。阪神タイガースは毎年選手が引退し、トレードがあり、新人が加入してメンバーが交替していく。何年かして、気がつけば、全員が入れ替わっている。全員が入れ替わっても、阪神タイガースは阪神タイガースである。メンバーが入れ替わっても変わらない阪神タイガースの伝統があるからだ。

誰がこの社会に加わったときにも、すでに言語はあった。いまこの社会のメンバーであるすべてがこの社会を去っても、社会は言語とともにあり続けるだろう。この意味で、社会は、（そのメンバーである）個々人の総和、ではない。それ以上のものだ。そして、それ以上でありうるのは、言語が社会に帰属しているからである。あるいは、もう少し広く言えば、社会が言語ゲームとして、この実物世界において展開し続けるからである。

*

社会の理論を構想するのに、社会／個人、の二項関係ではなく、社会／言語／個人、の三項関係を基本にしなければならない。

言語は、個々人の身体の内側にあり、かつ外部にある。個々人に先在し、すべての人びとに遍在する。意味作用をもち、遂行的な効果をもつ。人びとを包み込む、社会制度を形成することもできる。ゆえに、社会に直接帰属し、人びとの身体を媒介する作用力と想定することができる。このような想定にもとづく理論を、言語派社会学という。

言語「派」といえば、スクール（一定の人びとのグループ）を連想させる。けれどもこれは、数ある立場のひとつのつもりではない。すべての社会理論に共通する立場として、考えられた。それがすべての社会理論の常識になるまでのあいだ、「派」とみなされるだろうということにすぎない。

社会にあって、個人（の身体）はもっとも基本的な実在ではない。この実物世界に、身体として存在し始めた個人が、個人として自らを確立していく過程で、言語は身体に作用し、個人は言語に開かれていく。ルールを身につけ、言語ゲームに参入していく。言語を介して、他者たちが現れてくる。社会は、身体の生成（ないし疎外）の物語として展開していくわけではない。また社会制度の存立を、個々人の利害のゲーム論的な均衡として証明すべきでもない。なぜなら、社会理論にとって、社会の基本的な作用は、この実物世界にそなわっていると考えるべきだからだ。

*

人びとの身体の集まりを、空間とよぶことにしよう。ここで身体とは、個々人から社会制度の効果や属性を取り去った、感覚や認知や理解などの基本的な性能のことをいっている。実物世界は、さまざまな身体が散在した；社会空間でもあることになる。

身体と身体を関係させる、社会空間の基本的な作用力はまず、言語である。言語は、身体を波及する形式（パターン）であって、ルールであることを実質とする。言語が身体を介在することによって、その空間は社会となっている。

すでにみたように、言語は人びとのあいだに、意味的な作用を及ぼし、また、遂行的な効果を及ぼす。

言語に加えて、身体と身体を介在する、あと2つの作用力を考えておくことができる。

ひとつは、性。言語は、どの身体を介在しても無差別に意味作用としてはたらく。けれども身体は、置き換え不可能な個別性（個性）をそなえた、人格の台座である。個別の身体と身体が惹きあう作用を、性とよぼう。性は、性別や猥褻現象、家族・親族の秩序へと展開するが、それについては、『性愛論』（橋爪 1995）を参照のこと。

もうひとつは、権力。言語は、身体を介在して遂行的にはたらくことができる。たとえば命令。その効力が、発話者の意思に完全に帰属されないで、一定の適切性条件（社会制度の与える一定の条件）にもとづく場合、そこには、言語の遂行的な効力をこえた作用がはたらいっている。このように、人びとの身体の集合性が、社会空間のなかにはらむ相互拘束的な効果を、権力という。権力は、一般に、不定形な作用として社会制度のなかで潜んでいる。そして、人びとが自由（めいめいの行為はめいめいの意思にもとづくべきであるという原則）に自覚的となり、それを前提に生き始めると、権力は命名され、言及され、制度化される。制度化された権力は、その制度の外側でははたらかないように、注意ぶかくそれ以外の場所から排除される。

言語派社会学は、社会を、言語／性／権力の3つの基本的な作用力のうえに張られた空間と考え、それら作用力の複合としてさまざまな社会形象や社会制度の構成を考えていくというプランをもっている。

5 社会の実証的研究

そのプランの一端として、言語の派生形態や社会制度の実証的研究について考えてみよう。

言語にとって重要なことの、第1. 言語は、実物世界の因果法則によって支配されているのではない。したがって、具体的な個々の言語のあり方は、偶有的で、相対的である。すなわち、言語は、特定のグループの人びとが共有するカルチャー

(文化)である。

第2. 言語は、ルールに従う人びとのふるまいであると同時に、その産物である。産物としての言語に、加工品(言語と連動した人びとの行為の所産)や文字がある。文字は、言語の具体的な実践である言説を、テキストというかたちで定在させる。このように、言語と相関して実物世界に定立されたものを、言語的定在という。

テキストは秩序だった一連の行為の痕跡であり、実物世界のなかの客観的実在である。したがって、テキストを対象にした科学研究としての、言説分析(discourse analysis)を実行することができる。言説の集積は、言語へと写し取られた社会空間の像である。言説分析は、文学、歴史学とも関連する社会学の、標準的な研究の一方法となるだろう。

それはそれとして、言説分析の扱う言説は、言語活動の産物である。そして、言説を生み出した行為は、そこではすでに不在となっている。言説分析は、いわば古生物学や解剖学のように、死骸となった言語を扱っている。すでにはたらきを終えた言語の内部構造を、仔細に分析し、それが現に作動していた当時に復元しようとする。現に作動していた当時、それは言語と行為の複合であったはずだ。言語と行為が複合し、現に作動している社会空間をそのまま、考察の対象にすることを、ではどのように構想すべきか。

*

パーソンズやルーマンは、現に作動している行為の複合を、社会システムとして理論化した。言語派社会学が考える社会空間も、実態としては社会システムに類似している。しかし、大事な点で、異なった構想となっている。

パーソンズの考えた社会システムは、実物世界の出来事としての、さまざまな行為の複合のことである。それら行為の相互関係は、おもに因果論を前提にモデル化されていた。行為の秩序を与える社会構造は、機能と関連づけられ、一定の機能を果たさなければ構造が維持されなくなると想定された。そのいっぽう、パーソンズは、同時に行為の意図や意味を問題にし、行為の秩序を与える規範のはたらきを問題にした。因果論を前提にしているのが、行為の相互関係は関連づけられているが、行為の意味的な取り扱いがはっきりしないのが、パーソンズの世界システム論である。

ルーマンの考えた社会システムは、行為の意味的な接続を主題にする。そのぶん、実物世界の因果連関は理論の背後にしりぞき、機能についても扱いが軽くなっている。社会システムのなかでメディアとしてはたらく、権力にせよ、愛にせよ、貨幣にせよ、それが社会システムで普遍的に作用するのか、それとも特殊な制度的前提のもとで作用するのか、わかりにくくなっている。

これと比較して、言語派社会学は、つぎのような理論構成をとる。

第1に、社会空間の原理的な構成を論じる部分。社会空間は、実物世界のなかには身体が散在し、そのうえに言語/性/権力が作用しているものとして想定される。とりわけ言語が、身体に共通の現実を与えるものとして、重要である。そして、こ

れらの基本的な作用のうえに、それらが複合した社会形象が、さまざまに派生するメカニズムが、個別に論じられる。

第2に、特定の社会制度を前提とする部分。ある社会空間に、どのような社会形象がどのように派生するかは、偶有的である。歴史的経緯のなかで、それらの社会形象が選択され、制度的な前提となるときに、特定の社会システムが形成される。たとえば近代であれば、宗教と世俗の領域(政治、経済、文化)との分離、法の支配、契約自由の原則、自然科学と理性の優位、などなど。どの社会システムも、それぞれ特定の制度的前提をそなえている。そうした前提にもとづく社会制度は、多くの社会形象が組み合わさったもので、宗教のように複雑な構成をそなえていることもある。

社会について、観察可能なデータがとれるのは、この第2のレベルである。ここで、比較社会的な視点が必要になる。というのは、それらのデータは、異なる制度的な前提にもとづく場合がまあり、それを特定して斟酌しないと、データから正当な結論を導くことができないからである。パーソンズが社会システム論を展開しているのは、このレベルであり、そこでは、アメリカ社会の制度的な前提が、過度に一般化されているきらいがあった。ルーマンは、社会システムの制度的な前提が形成される歴史的経緯についてずっと慎重であるが、制度にかかわらない社会システムの一般理論と、制度を前提とする社会システム論との関係がなお鮮明でない。

第3に、制度的な前提に加えて、モデルの前提を特定したうえでの社会理論。近代の社会システムのなかにも、市場や、民主政や、法制度やといったさまざまな部分システムがあり、また、ゲーム論の取り扱うような抽象的モデルを考へてみることもできる。それらについて、いっそう絞り込んだ特殊な前提から、演繹的な理論を構成する可能性。あるいはそれを、社会統計やアンケートなどのデータによって検証する可能性。ここでは、理論と実証の、往復運動を設計することが、比較的容易だ。

言語派社会学は、第1の原理的な議論と、第2の制度的な社会システムの成立との関係を、理論的な考察の主題としている点に、特徴がある。この理解によれば、「社会が自由な個人によって構成されている」という認識も、特定の制度的前提によって与えられる効果である。すなわちそれは、自明のことではなく、それ自身が社会的に説明されるべきことがらだ。もうひとつの特徴は、第1の点と関連するが、さまざまな社会の差異を、比較社会的な相対性に解消しておわるのではなく、その根底にある普遍性によって基礎づけようとする構想とプランをもっているという点である。

この構築途上の試みを、さまざまな人びとがさらに発展させるなら、すばらしいことである。

[文献]

- 橋爪大三郎, 1985, 『言語ゲームと社会理論——ヴィトゲンシュタイン・ハート・ルーマン』勁草書房.
- , 1995, 『性愛論』岩波書店.
- , 2000, 『言語派社会学の原理』洋泉社.
- Lévi-Strauss, Claude, 1958, *Anthropologie structurale*, Paris: Plon. (=1972, 荒川幾男ほか訳『構造人類学』みすず書房.)
- Luhmann, Niklas, 1984, *Soziale Systeme*, Frankfurt am Main: Suhrkamp Verlag.
- 大澤真幸, 1990, 『身体の比較社会学 I』勁草書房.
- Parsons, Talcott, 1951, *The Social System*, New York: Free Press. (=1974, 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店.)
- Saussure, Ferdinand de, 1916, *Cours de linguistique générale*, Paris: Payot. (=1986, 小林英夫訳『一般言語学講義』岩波書店.)
- 盛山和夫, 1995, 『制度論の構図』創文社.
- Weber, Max, 1922, "Soziologische Grundbegriffe," *Wirtschaft und Gesellschaft*, Tübingen: J. C. B. Mohr: I, 1-30. (=1972, 清水幾太郎訳『社会学の根本概念』岩波書店.)
- Wittgenstein, Ludwig, 1922, *Tractatus Logico-Philosophicus*, London: Routledge & Kegan Paul. (=2003, 野矢茂樹訳『論理哲学論考』岩波文庫.)
- , 1953, *Philosophical Investigations*, Oxford: Basil Blackwell. (=1976, 藤本隆志訳『哲学探究 (ウイトゲンシュタイン全集 8)』大修館書店.)

Theoretical Construction of Linguistic Sociology

HASHIZUME, Daisaburo
Tokyo Institute of Technology

hashizm@valdes.titech.ac.jp

Duality of action, that is, the relation between the two facts—action is an event in the real world and action becomes effective through an understanding of its meaning—has never been appropriately argued in past sociological theories. Structuralism indicated that the level of signs is detached from the real world (the principle of arbitrariness) and refuted the assumptions of Marxism. The language game is a concept proposed by Wittgenstein who surpassed the assumed duality through structuralism and adhered to the notion of singleness of this world. Action is meaningful in terms of peoples' behaviors or the language game. Its meaning is revealed as the finite sequence of individual items in the real world.

Language is an intercorporeal form that is transferred between scattered bodies in the real world. Linguistic sociology assumes language, sex, and power to be the three fundamental operators in the social space. Various social figures are derived from these three operators, and some are selected as institutional premises for establishing the actual social systems. In this manner, linguistic sociology can formulate a comprehensive theoretical construction comprising both universal principles of society and an empirical investigation of social systems.

Key words: real world, language game, linguistic sociology